

No.68

2014年2月27日

すてきなあなたへ

編集発行：宮ノ台女性井戸端会議

連絡先： 佐倉市宮ノ台4-26-8

Tel&Fax：043-461-7004

佐倉市議会って、どんな？

あなたが選んだ市議は何をしていますか

選挙の時はさわがしいけれど、当選した市議会議員は、議会でどんな活動をしているのかしら。私たちが選んだ市議は、しっかり働いているのでしょうか。本会議や委員会開催時に傍聴に出かけるのが一番なのですが、まず平日の昼間ですから、難しいですし、議場がよく見えない傍聴席の居心地の悪さと言ったら、1~2時間が限度でしょうか。最近、本会議に限って、開会中は生中継が、1週間後には録画で配信されるようになりました。本会議の様子は家にいながらわかるようになりました。

ちなみに、あなたが投票した議員が、この一年間どんな質問していたかを調べてみてはいかがでしょうか。

『市議会だより』

新聞折り込みで届く、『市議会だより』がもっともなじみのあるものでしょう。年4回発行（5・8・11・2月）です。その内容は、①定例市議会の一般質問要旨（代表質問と個人質問）②議案賛否一覧 ③主な議案の概要 ④会派等の意見 ⑤委員会報告などが掲載されています。紙面の関係で、あくまでも要旨なので、わかりづらいけれど、全貌がつかめます。「個人質問」の質疑のやり取りで、わずかながら、その議員の関心と勉強具合がわかります。

CATV296の中継録画

本会議（初日、一般質問、最終日）の様子が開催日の翌日夕方5時30分から録画が放映されています。代表質問は開始から質疑を含めて70分間、個人質問は開始から50分間、時間が限られ、質疑が尻切れトンボになることが多いのもたしかです。

佐倉市議会のホームページ

- ・「生中継」 2013年6月議会から始まり、日程さえ合えば、傍聴よりは視聴がたやすいので助かります。
- ・「録画配信」 2012年5月の本会議から視聴可能で、会議名・議員名、会派名、用語で検索ができるようになっています。まだ収録期間が短いので、今後の蓄積が大事になります。ようやく実現した生中継と録画配信は「議会基本条例」制定の成果の一つと言えるかもしれません。<http://www.sakura-city.stream.jfit.co.jp/>
- ・「会議録」 「会議録」は1989年以降の市議会本会議の会議録が、年月・定例・臨時の別、

発言者、トピックなどによって検索できるようになっています。

http://sakurashigikai.gijiroku.com/voices/g08v_search.asp

なお、各委員会の会議録は、市民に公開されることなく、あくまで傍聴の手立てしかないのも、よく考えるとおかしいのではないのでしょうか。

「議会報告会・意見交換会」はどこへ

市民と議会を結ぶいくつかのパイプが出来上がりつつあるのですが、どれも一方通行です。そこで、「議会基本条例」に基づいて、3年前から市民と議員による「議会報告会・意見交換会」が開催されはじめました。一昨年の暮れには2回目が開催されました。市民から議会への注文もいろいろ出て、3回目はいつだろうと思っていた矢先、昨年、暮になっても何の音さたもないと思っていたら、突如、市民を対象とした「報告会・意見交換会」は、なんと、若い人の意見も聞きたいと敬愛短大生、そして商工会議所・観光協会のスタッフとの限られた人たちとの「意見交換会」に衣替えをしてしまったのです。

色々な工夫をして、様々な人の意見を聴くことは大事ですが、「議会基本条例」本来の、市民にひろく開かれた「意見交換会」を中止してしまったのは本末転倒です。そういえば、商工会議所も観光協会も、市役所から人件費補助を受けていて、その曖昧さを監査委員会から何度も指摘を受けている団体なので、議会は、意見交換会よりも先にやることのあるのではないかと思うのです。少なくとも2回の実績のある意見交換会は、議員と広く市民との間の風通しをよくする手立ての一つではないのでしょうか。同じ方式を3年と続けられないなんて、議員たちが面倒になり始めたのでしょうか。怠けてはイケません。

もともと、各会派の議会日より、議員個人の報告などが、個別に出され、新聞折り込みや戸別配布で届くようです。が、これだけ見ていたのでは、全貌がつかめません。開かれた市議会にするためには思いつく多様な手立てをフルに活用したいものですが、その基本を忘れないよう、市民がチェックしていかなければならないでしょう。(U)



編集後記：ときならぬ大雪に、わが町も機能マヒに陥ったようです。2月9日は、モノレールも運休、ヤマト宅急便の配達も集荷も休業、私が参加しているコミセンでの小さな集まりも中止となりました。東と北が道路の我が家では、まず北側の道路を優先して雪かきをしました。翌日の月曜日は、小学校は休校、生協の配達も、冷凍冷蔵品が届かず、果物だけでした。配達を済ませたその生協のトラックが、チェーンを付けていたにもかかわらず、立ち往生してしまいました。家人とご近所の方々とタイヤ周辺を除雪、ようやく、発進出来たようなわけでした。8日、東京に出かけた友人は、帰路の京成線が鬼越駅でストップ、一晩明かしたそうです。11日に続き、つぎの週末も記録的な降雪に見舞われました。雪国の苦労が思われる2月でした。

前号との間がだいぶ開いてしまいました。編集スタッフの事情でした。お詫びします

なお、つぎのサイトでは44号から閲覧することができます。ご意見、ご寄稿をお待ちしています。 <http://dmituko.cocolog-nifty.com/>

近頃の〈NHK〉っておかしくないですか？

NHKをつけたつもりなのに、お笑い芸人が並んでガハハと騒いでいて、民放と間違えたかな？と思わず、チャンネル切り替えたことってありませんか。この2月は、まるでオリンピック専門チャンネルの様相を呈していたNHKテレビ。パラリンピックにどれほどの熱意を示すだろうか。

近頃は、首相をはじめ政府の要人が何を言い出すか不安なので、夜7時のNHKニュースを見るようにしているが、ソチでのオリンピックが始まると、気象情報を除いて28分のニュース枠で、ほぼ3分の2、20分近くがオリンピック関連で占められることが多かった。あとは全国的な大雪が重なり、その関連ニュースが入ったこともある。事件・事故も確かに多かった。タイやウクライナの政情も緊迫していた。

しかし、この間、国内では、とくに重要な論議がなされていたのである。

集团的自衛権・沖縄県知事の基地移転承認など軍事・外交、消費税増税・福祉切り捨て・派遣社員問題、大詰めのTPP交渉など景気対策とは真逆の政策、東日本大震災にかかる三年目の被災地の復旧・復興の遅れ、原発再稼働などのエネルギー対策など様々であった。それに加えて、なんとNHKの会長のとんでもない発言、首相推薦のNHK経営委員の暴言も続いた。

にもかかわらず、NHKは「7時のニュース」で何ほどを伝えただろうか。国会中継に関しては、政府答弁中心の広報的要約でしかなかったし、NHK問題に関しては、ダンマリを決め込んだ時期もあった。オリンピックに限らず、日常的にも28分のニュース枠にサッカーや野球選手の移籍問題に長々と時間を割くことがあった。視聴者の関心が高く、放送したいというならば、スポーツ番組の時間や教育テレビでやってほしいと思っている。7時のニュースは、そのニュース項目の選択と放送順序、放送時間のバランスをよく考えてほしい。視聴者の受信料で成り立っている公共放送であって、「国营」放送ではないのだから。

もちろん、いくつかの好きな番組もある。なかなか録画を消せない番組もある。視聴者の声を、素早く率直に届けることも大事なのではないかな。(M)

ネット上でNHKのホームページから

「みなさまの声にお応えします」<http://www.nhk.or.jp/css/> (視聴者窓口)

以下の4つの方法が記されています。

- ①電話：0570-066-066 (ただし、混んでいるときは通じにくいので根気よく！)
- ②FAX：03-5453-4000
- ③eメール：<http://www.nhk.or.jp/css/goiken/mail.html>
- ④手紙：<http://www.nhk.or.jp/css/goiken/letter.html>

〒150-8001(住所の記入は不要です)NHK放送センター ○○○○行
(○○には、番組名や部署を書く)

菅沼正子の映画招待席 40

ウォルト・ディズニーの約束

—名作「メリー・ポピンズ」誕生秘話—

ウォルト・ディズニーが誇る不朽の名作「メリー・ポピンズ」(1964年)。アカデミー賞5部門を受賞。主題歌賞の〈チム・チム・チェリー〉をはじめ、それらの楽曲は今やスタンダードとなっている。パパもママも仕事が忙しくて家族の団らんが持てないバンクス家に、パラソルを開いて東風に乗ってやってきたメリー・ポピンズが、バンクス家だけでなく、街中の人々を幸せにし、最後は西風に乗って空に舞い上がっていくというストーリー。当時、映画化にあたっては原作者の許可が得られず大変難航したと言われていたが、製作から50年の節目の年に、その舞台裏が明かされる。

1940年代のこと。ウォルト(トム・ハンクス)の愛娘の愛読書は『メリー・ポピンズ』。「パパ、映画にしてよ」といわれ読んだウォルト自身が乗り気になった。ところが原作者は映画化について話し合いさえ拒み続け、娘との約束を果たせないまま20年が過ぎた。原作の売れ行きにかげりがみえ始めると、原作者のP.L.トラヴァース夫人(エマ・トンプソン)が、話し合いに応じてハリウッドにやってくる。チャンスを逃すなとばかり、ディズニー・スタジオあげでの〈お・も・て・な・し〉だが、上へ下へと神経はピリピリ。オーナーであるウォルト自身が出迎えてディズニーランドを案内するシーンなどは見ている方も楽しくワクワクするが、トラヴァース夫人のかたくななこと!ミュージカルはダメ、アニメなんかもってのほか、シナリオにも参加する、とまあ製作に関してはともかくとして、ロスの空港の匂いが嫌いとか、作曲のリチャード・シャーマンが赤いベストを着ていたら、赤は嫌いとか、だだっこみたい。まるでその気はない。それでもウォルトは粘り強く、サイン寸前まで持ち込んだが、実写の中にアニメのペンギンが入ってくるシーンで、夫人は激怒、ロンドンに帰ってしまう。

すぐさまロンドンへ追いかけたウォルトは「あなたの大切な〈メリー・ポピンズ〉は私も大切にする、約束は守る」と。感動が込み上げるシーンだ。トム・ハンクスの真摯で温かいパーソナリティがとてつもない味。このぬくもりに、意固地だったトラヴァース夫人の心も解きほぐされ契約書にサインしたのだが、〈メリー・ポピンズ〉のバックグラウンドが重要だったのだ。

トラヴァース夫人はオーストラリア人で、幼少の頃はパパっ子だった。その生い立ちがキープポイントなのだ。オーストラリアの草原で、パパに馬の背に乗せてもらって走る爽快感は、メリー・ポピンズが空を飛ぶことになる。父親は銀行マン。銀行マンといえば社会的には冷徹なイメージがあるが、仕事は想像以上にハードでも、家庭でのパパは実に子煩悩。おとぎ話もよく聞かせてくれた。この父と娘の関係こそがトラヴァース夫人の心を左右するのだ、と理解したウォルトは「過去に支配されない人生を歩もう、バンクス氏の名誉を回復させる。前向きに生きるためのメッセージを盛り込み、人々に希望を与えよう」と説得する。この映画の原題は〈SAVING MR.BANKS〉。トム・ハンクスとエマ・トンプソン、アカデミー賞俳優の2人の感情のこもった演技はさすがだが、トラヴァース夫人用のリムジンの運転手役ポール・ジアマッティがいい演技を見せる。(3月21日〈金・祝〉より、全国ロードショー)